

《その他》

再び、外国人のためのポルトガル語夏季集中講座見学の記

——外国語学習者の雑感を交えて——

Uma outra reportagem acerca do Curso Intensivo de Língua Portuguesa para os alunos estrangeiros realizado na Universidade da Beira Interior (Covilhã), no contexto de intercâmbio do Programa Erasmus da União Europeia.

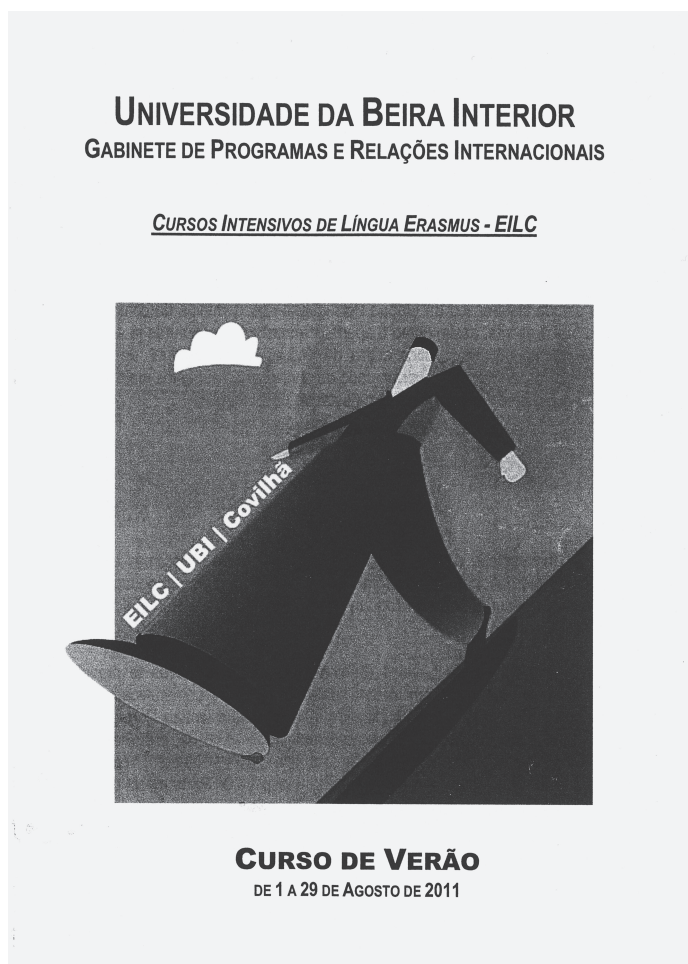
日 埜 博 司 (HINO Hiroshi)

キーワード ベイラ・インテリオール大学, EU エラスムス・プログラム, 外国人のためのポルトガル語, 音読で学ぶ

EU エラスムス・プログラムの一環として行なわれる「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座」が、ポルトガル内陸の拠点都市のひとつコヴィリャン (Covilhã) のベイラ・インテリオール大学 (Universidade da Beira Interior, 以下 UBI と略称) で開催された。期間は 2011 年 8 月 1 日から 8 月 30 日まで。2009 年夏に小倉健史 (2011 年 12 月現在, 社会学科 3 年。以下, タケシと呼ぶ) が参加して以来 2 年ぶりの開催である¹。2010 年夏に予定されていた同講座が中止となったその直接の原因は、2010 年 5 月にギリシアの経済危機がいよいよ顕在化したことにあったが、2011 年夏は当のポルトガル自身が深刻な経済危機に見舞われているさなかの開催だ (ポルトガルが EU と IMF から経済支援を受けたと明らかになったのは 2011 年 5 月のこと)。最悪の場合、2 年連続の開催中止に追い込まれるかもしれぬと危惧していただけに、逼迫した状況下、開催の勇断を下してくれたポルトガル文教

¹ 日埜博司「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座見学の記——ベイラ・インテリオール大学と EU エラスムス・プログラム」『流通経済大学流通情報学部紀要』14 巻 2 号, 2010 年。

当局の英断に心からの拍手を送る。



「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座」プログラム表紙

2009 年夏、タケシを引率しさらに娘も同行させてこの集中講座を初めて垣間見る機会を得た。講師を務めてくださったアナ・リタ・カリーリョ先生 (Professora Ana Rita Carrilho) のすばらしい授業とお人柄に感銘を受け、さらにはコヴィリャンでの快適な暮らしに魅了され、2011 年は学生の参加の有無にかかわらず、私としてはともかく出掛け、学長を表敬訪問し、先方の要望あれば日本学関係の講義など多少こなしてくる心づもりでいた。2009 年から 2010 年にかけて何らかのかたちで参加の意思を表明していた学生に対し、待望の集中講座が 2011 年夏は開催される運びとなった旨電子メールで連絡してやると、結局、3 名の学生が集まり参加を決めた。

別途特筆するが、今回、尾河直哉氏が、何と「一生徒として」(como um aluno!) 本場のポルトガル語授業を体験なさることになった。2009 年夏以来折にふれて、前記講座とそれに伴う課外活動の充実ぶりを大いに吹聴してきた成果であろう。筑波大学でロシア語を学ぶ尾河先生の子息^{なおひろ}直大君も父君ともども参加する心づもりであったが、サンクトペテルブルクへの短期留学が一足さきに決定し、学費の払い込みも済ませてしまった由で、今回は断念なされた。

今回も、格安航空券の準備と、リスボアのホテルの手配は、私の責任で行なった。2009 年この集中講座に参加する機会を得た娘が旅行会社某に就職したため、下らぬオヤバカから、ここを通じて航空券を手配させることを試みる。いよいよ総勢 5 人の旅程が確定、しかし時期が迫りすぎたためなのであろうか、到底格安とは言えぬ値段でしか手配できなくなった、との連絡が娘から入る。提示された料金ときたら、学生たちはおろか尾河先生にも顔向けできぬほどの、とにかく目の前がマックラになるような値段である。なるようになれ、という気持ちで株式会社タビックスジャパン竜ヶ崎支店へ文字どおりの救援を願い出たところ、たまたま電話口に出てくれたのが西内麻里子さんという女性社員。本学経営学科の卒業生だという。OG であるというよしみだけで、私の懇願を気の毒に思ってくれたか、その場の電話連絡だけで——つまり旅程表を書面で送信せよとか何とか、そういう役人ふうの手続きは一切省いてくれて——、某社より優に 10 万円以上は安い航空券の手配へ早急に漕ぎつけてくれた。リスボアの定宿はホリデイ・イン(同クラスの他ホテルより部屋が広いようだ)と決めているのだが、より便利な位置に新築されたホリデイ・イン・コンティネンタルなどの手配も遺漏なく行なわれた。

西内麻里子さん、ありがとうございます。あなたは旅行業者のカガミです(この一年本学広報誌 RKU Today でちょっとした連載を行ない学外の方にも広く読まれて幸い好評であったようだが、ともかくこれがきっかけとなり、同誌をスミからスミまでじっくり関する機会を得た。欲をいえばキリがないが、卒業生インタビューの企画など、彼女の如き日々地道な奉仕的業務に励んでいる人たち、さらには、マジョリティーの型にはまらず多様な活動をしている人たちの動静をこそ、優先的に取材したらどうだろうと申しあげる)。

あれやこれやの綱渡りを終え、何とか 7 月 26 日、成田空港を発ちアムステルダム経由、同日夜

遅く、リスボアへ着く。尾河先生を含む総勢 5 名。参加を決めた順番に学生名を記すと、熊谷瑞希(女。経営学科2年)、渡部沙也佳(女。経営学科2年)、佐藤一樹(男。経済学科2年)である。以下、ミズキ、サヤカ、カズキとそれぞれ呼ぶ。

アムステルダム・スキポール空港では5時間くらい乗り継ぎ待ち合わせの時間があつた。長居できそうなカフェを見つけホットチョコレートなど振る舞って、いろいろ話していると、サヤカが手荷物の中から巻物のようなものを取り出す。校長先生まで務めたという祖父君からの“教訓状”である。“人生と旅とに枢要なる十一カ条”のようなあれこれが、こまごまとした毛筆で(!)書き連ねてある。これはこれは、と苦笑しつつ一読。内容はさておき、祖父君が孫娘をさん付けで呼んでいることが、私には興味深く思われた。

「実」であれ「義理」であれ娘や息子をさん付けで呼ぶ感覚は、私にはやや馴染みが薄い。本学附属高校の校友誌で見た記憶があるのだが、娘や息子宛てのメッセージの中で、実の子を「あなた」とか「きみ」とか呼ぶ親御さんがいるようだ。今はどの家庭もそんなふうなのか。こういう場合どう考えても、「お前」とか名前の呼び捨て以外、私には適切な呼称が思い浮かばない。

昔、私の母(京都生まれ)など子どもの私をヒロシと呼び捨てにする一方(あたりまえだ)、便秘気味だった私を氣遣うときはいつも、ヒロシ、ウンコさん出たか、と言っていたものだ(つまり私は、ウンコより格下だったのだ)。京都ではオイモとかオカユとかオマメとかとにかく身体にいいものをよくさん付けで呼ぶ。このような美しい言語習慣は永く遺してゆきたいものだ。

どうせコヴィリヤンに着いたら一番に学ぶ表現なのだからと、スキポール空港でのあり余る時間を利用し、サヤカに A は B が好きだとか A は B を好むという表現を教える。ここで、イタリア語やポルトガル語にも造詣の深い(「造詣が深い」というのは単なる社交辞令ではなく、後述のとおり、それぞれの言語において堂々たる翻訳作品を生み出す能力をすらすらお持ちだという意)尾河先生にも話に加わってもらう。ポルトガル語では現代の英語と同じように、ヒトを主語に立て、好きであるモノやコトを目的語として後置し、そのスキマを *gostar de* という自動詞+前置詞で埋める。ところがロマンス諸語(ラテン語を祖語とする諸言語)には、同じ意味を表わすのに、ポルトガル語とは異なる発想法を採る言

語が幾つか存在する。たとえばイタリア語がそうだ。読書が好きだなら、ポルトガル語では *Gosto de ler livros.* となるところ、イタリア語では *Mi piace leggere libri.* という具合だ。ポルトガル語にあつて主語は *eu* であるから、動詞は一人称単数となるのに対し、イタリア語では「読書することは(が)私を魅了する」という構文となる。「読書すること」が文法上の主語であるから、動詞は三人称単数だ。

こんな基本的で単純な表現ひとつとっても、姉妹関係にある言葉同士でありながら発想法において微妙な相違が認められるのだ。

それにしても、今回の集中講座に畏友尾河直哉が参加してくれたことは、私にとって大きな喜びであった。このひとは、いわずと知れたフランス文藝評論の大家であり、アナール歴史学派の巨頭ブローデルの業績を日本へ紹介するにあたり大きな足跡を残しつつある研究者のひとりだ。今回の旅にも藤原書店から上梓寸前のアラン・コルバンの大著『快樂の歴史』和訳の分厚いゲラを持参し、その校正作業をあまりあると思えない自由時間を使って懸命に進めていた。

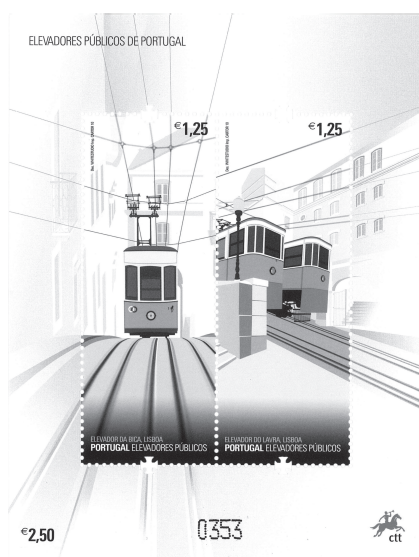
私如きドンくさい手合いから見たら語学的天才としか思えぬ尾河氏の守備範囲(前述のように本格的な翻訳作品を現実に生み出す能力があるという意)はイタリア語からポルトガル語へ及ぶ。イスパニア語だってかなりの速度で精読なさるであろう。ブラジルの文豪ジョルジュ・アマードの佳作『丁子と肉桂のガブリエラ』を彩流社から和訳上梓なさったとき、固有名詞の日本語表記法について多少の御下問に答えたことがあり、それがきっかけとなって爾来おつきあいを願っている。彼の学術論文を評価するなど私には不可能であるが、多数に上る翻訳作品を熟読してこのひとの豊かな日本語センスを感得するだけなら、私にも可能だ。とにもかくにもこの非凡の才能と、まる一ヵ月生活を共にし机並べて勉強に励めるなど、私のみならず本学の生徒連中にとっても幸運の極みと言わねばならない。

8月1日(月曜日)の開講に向け7月30日(土曜日)にコヴィリャン入りするまでのまる3日間、お決まりのコースではあるが、皆でリスボア市内の探訪を楽しむ。タクシーやレンタカーは敢えて使わず、リスボア「七つの丘カード」という切符(市内観光スポットを網羅するメロ、バス、路面電車はもちろん

ん、急坂を上り下りするエレヴァドールまでが、最初の改札通過から24時間、ほぼすべて乗り放題)を利用する。朝飯を済ませた皆をロビーに集め、一応は、どうする、皆ひとりひとり勝手に歩くか、と訊ねてみるが、やっぱりガイドは欲しいということに。夏のリスボアでは必ず持ち歩いたほうがよいミネラル水の買い込みを済ませ、いざ街へ――。



Fotografia: Luis Ferreira Alves. ビカのエレヴァドール。Jaime Fragoso de Almeida, *Elavadores, Ascensores e Funiculares de Portugal*, CTT Correios de Portugal, 2010 より



ポルトガル郵便が発行した切手。左側がビカのエレヴァドール

再び、外国人のためのポルトガル語夏季集中講座見学の記

素人ボランティアガイドくらいにならいつでも喜んでなるが、この国では特に博物館や美術館で、一定人数を集めトクトクと——しかしもちろん低い声で——おしゃべりしていると、ガイドを行なう人々で作る組合(?)の構成員と思しき人がどこからともなく現われ、注意を受けることがある。正式のガイド免許を持つ者から仕事の機会を奪うようなことは、たとえ些細な事例でも許さない、という不文律もしくは明文文化された決まりがあるらしい。少ない職場をつましく分けあうというワークショップ精神の発露であろうと思われ、その考え方自体に異議をはさむ余地はあるまい。

さて。前記広報誌 RKU Today の連載最終回のテーマは、1755 年 11 月 1 日朝のリスボアを襲った巨大地震とそれに伴う大津波、と決めていた。だから、火災と津波で壊滅したリスボアの復興を、強権を振るって推し進めたポンバル侯ゆかりのスポットへ皆を導く。メトロ「マルケス・デ・ポンバル」(Marquês de Pombal) 駅を地上へ上がると、リスボアで最も大きなロータリーが現われる。その中央にみずからが再興したリスボア中心街を見下ろすように^{きつりつ}屹立するのが、ポンバル侯ことセバスティアン・ジョゼ・カルヴァーリョ・イ・メーロのブロンズ像だ。



《リスボア壊滅》。フランスの銅版画。リスボア市博物館 (Museu da Cidade, Lisboa) 蔵。Ana Cristina Araújo, *O Terramoto de 1755: Lisboa e a Europa*, CTT Correios de Portugal, 2005 より。ポルトガル南西部沖を震源とする推定マグニチュード 8 を超える巨大地震が 1755 年 11 月 1 日午前 9 時 30 分すぎのリスボアを襲う。繁栄を誇った首都の中心街は、誘発された大火災に加え、テージョ河を遡った大津波のため壊滅。この震災はヨーロッパ精神史にも深刻な影響を及ぼした



《リスボア再建の設計図を建築家へ手渡すポンバル侯》。マウリーシオ・ジョゼ・ド・カルモ・センディーン作，リトグラフ，リスボア国立図書館 (Biblioteca Nacional de Lisboa) 蔵。
1755. *O Terramoto de Lisboa: The Lisbon Earthquake*, Lisboa, Argumentum, 2004 より

フランシスコ・ザビエルの来日をもって開幕するキリシタン時代，世俗権力への^{ようかい}容喙を好むイエズス会宣教師の悪癖は日本でも遺憾なく(?)発揮され，あげくの果てわが為政者の不興を買い，ついには追放の憂き目を見るに至るのだが，未曾有の震災で壊滅してしまったリスボアを，独裁的権力を振るって再興しようとするポンバル侯にとり，奸智に長けたイエズス会士はうっとおしい目の上の瘤^{こぶ}であった。ポンバル侯は政権を握るやイエズス会の追放を断行する。その姿は，政治の世界から宗教——の仮面をかぶった軍事勢力——をきれいに切り離すという容易に見えながら中世日本において何びともなし得なかった壮举を，叡山焼き討ちという荒療治でやってのけた織田信長のそれと重なりあう。

リスボア西郊のベレン地区へゆき，世界遺産ジェロニモス修道院とベレンの塔を訪ねれば，石柱のユニークな浮き彫りのひとつひとつを改めて食い入るように見，彫刻師の遊び心溢れるモチーフに感心したり喜んだり，このコショウの実の浮き彫りこそ大航海時代の産物だとか何とか(ヨ

ヨーロッパ人垂涎^{すいぜん}的であったコショウなど香料への欲望から、ポルトガルはインドへの海路直航ルート開拓に血眼となった)、尾河先生と夢中で話し込んでいると、早々に見学を終えたと称するミズキとサヤカが、おとなしく、あるいは退屈して、それでも静かに待っている。

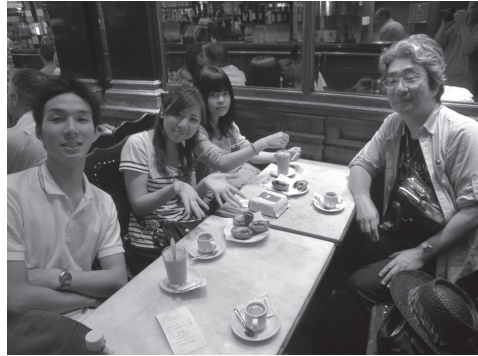
かなり前、ポルトガルの食文化を卒業論文に取り上げた井上美帆子という国際観光学科の卒業生がいたし、私自身ヒトの生存を根源的に支える「食」へ深い関心を寄せてもいるのだが、サヤカも食べることに格別な興味があるらしく、集めた旅行ガイドから、グラビアページに載っているタコ御飯とかスイーツの数々とか、いろいろ楽しそうに見せてくれる。食いがポルトガル語学習の原動力になるならこんな結構なことはない。これぞモチベーションというやつ、ポルトガル語でいえばモチヴァサオン *motivação* である。

私など特に旅行中は朝飯をしっかり食べるので、夢中で観光などしていたら、晩飯まで昼飯とらなくても平気である。ただしその習慣を皆に押しつけるのは気がひける。せっかくだからどこか由緒あるカフェでゆったり「お茶する」(ああいやな日本語だ)ことにしようと衆議一決、ベレン地区からセントロ(中心部)へ戻る。有名なビカのエレヴァドール(ほとんど登山電車のような急勾配!)に乗り込みパイロ・アルト(高台地区)のシアードへ。リスボアで一番賑やかな一画だ。詩人アルメイダ・ガレットの名を冠したガレット通りの名店「ア・ブラジレイラ」へ入ってみる。店の外にまでところ狭しと並べられたテーブルの間に脚を組んで腰掛ける詩人フェルナンド・ペソーアの像。観光客や地元住民の賑わいが四六時中絶えない。

ポルトガル全土で広く供されるパステル・デ・ナタ(エッグ・タルト)はもともと修道院で修道女が社会活動の一環として作っていたお菓子だ。表面の生地をやや硬く焼いたシュークリームのようなしろものであるが、しかしそのクリームは卵黄がたっぷり使われコクがあり風味も濃厚で確かにうまい。上からニッキの粉が振りかけてあるのもクリームのおいしさを引き立てる。サヤカはこれを3つ食べてもまだいけるというので、この後の晩飯食えるのか、と余計な心配をすると、スイーツと御飯はちゃんとベツバラに収まるからダイジョブなのだそう。



パステル・デ・ナタ。ひとつでは物足りないという向きが多いせい、たいていパステイス・デ・ナタ *pastéis de nata* と複数形で呼ばれる



カフェの名店「ア・ブラジレイラ」にて

皆が機嫌よくパステル・デ・ナタを賞味しているそのさなか、私は黙々と *café* すなわちエスプレッソだけをいただく(ポルトガルではカフェと言えばエスプレッソのこと)。2杯くらいお代わりし、そのたびアスカー(*açúcar*, 砂糖)は入れるけれど(しかしあまりかき混ぜず浮き上がってくる *açúcar* の甘みだけを楽しむ)、ともかくその程度でやめておかないと、私に限っては晩飯がうまく食えない。

満足して店を出るとき、サヤカは言った——センセイ、パステル・デ・ナタ、ハンザイテキニオイシカッタデス。犯罪的においしい！ サヤカは加齢阻止(アンティエイジング)にも関心あるらしく、由美かおるみたいな——とは具体的に言っていなかったけど——奇跡の体形を50代になっても保つと決めているのだそう。その頃になって永年愛したパステル・デ・ナタ(高カロリーかつおそらく高コレステロール！)がヤッパ“犯罪的”だったと後悔しても、わしゃ知らんぞ。

リスボア観光一日目のスケジュールは「ア・ブラジレイラ」で切り上げ。早めにホリデイ・インへ戻り、晩飯まで休息。腹が減るのを待って、私が2004年リスボア新大学(*Universidade Nova de Lisboa*)での在外研修中、カンティーナ(学生食堂)代わりに愛用していた小奇麗で家庭的な雰囲気がステキな中華料理「金満樓」へ。ポルトガル観光大使主催の華麗なる夕食会へ皆をいざなう。ドレスコードは、ない。

出発前、到着翌日の夜にコレコレこういう招宴がアリマスと伝えと、それを真に受けた尾河先生、あとで奥様から、これがヒノサンのささやかなオゴリだと即座に気づかぬアナタハツクゾクアホ

ダと言われたそうだ。詐称ではあってもこれで不当利得をポッケに入れるわけでなし、平素そこそこ貢献しているのだから、観光大使と名乗ったって別段バチは当たるまい。

運勢とは不可解なもので、2010 年秋、小生はポルトガル共和国から叙勲されてしまうという栄に浴した(メリト勲位コメンダドール章。デメリトの間違いでしょうと冷やかされた。うまいこと言うなあ)。だからこそなおさら、これからも大いに詐称を重ね、かの国の観光振興の一翼をしっかりと担わねばならぬのである。とにもかくにも「金満樓」で総勢 5 名、大いに飲んで食ってデザートまでしっかりいただいて、満腹上々の気分になったところで、さてお会計をしてもらおうと、何とたったの 60 ユーロ。どう考えても安すぎる(ニホンがバカ高いだけか)。おそらくヒロシ(私のこと)がまた客を連れて戻ってきたというので、出血サービスしてくれたのであろう。ああ優しい国だ。

7 月 30 日。コヴィリャンへ向かう日である。ホリデイ・イン・コンティネンタルのメトロ最寄り駅カンポ・ペケーノ(Campo Pequeno)へ向けてガラガラと重い荷物を運び出し、国鉄駅へ直結するオリエンテ駅(Gare do Oriente)へ移動。昼過ぎ、コヴィリャンゆきの直通列車に無事乗り込む。

国鉄コヴィリャン駅では 2009 年と同様、今回も我らのモニターラ(monitora. 世話役)を務めてくれる旧知のパトリシアが待ち受けていた。コミュニケーション学を専攻する魅力的な女性学部生。今回は年下のモニタール(monitor. monitora の男性形)を差配する立場に就いたせいはいささか貫禄もついている。駅頭で当然ながら抱擁(ハグ。ポルトガル語でアブラッソス abraços)の御挨拶。やっぱりこのアブラッソスをやらないとポルトガルへ来た気がしません。



今回も私どもの世話役を務めてくれた UBI のパトリシア。2009 年にアルメイダで行なわれたナポレオン戦争記念祭に際し撮影。19 世紀初めポルトガル庶民のいでたち

唐突なようだが、東京ミッドタウンのサントリー美術館で 2011 年 12 月 14 日まで開催された特別展『南蛮美術の光と影』に、久しぶりに南蛮屏風の名品が多数出陳された。これらは、狩野派や長谷川派に属する日本人絵師が 16 世紀終わりから 17 世紀初めにかけて長崎のようすを実見したうえで描いたものなのであるが、ふと思い立ち、そこに南蛮人同士抱擁の挨拶を交わす場面があるかどうか調べてみた。握手らしきことをしていたり肩を組み合ったり来航した黒船(南蛮船)にもろ手を上げて歓喜したりするポルトガル人の仕草は確認できるものの、抱擁による挨拶は他の作品にあたってみても描かれていないようであった。

しばしば引用するルイス・フロイスの『日欧文化比較論』(1585 年に島原半島の加津佐で脱稿)に箇条書きの愉快的な一項がある。ポルトガル語平常試験に毎回出したい文なのでここで誌上公開しておく。フロイスがそれまでの全 13 章でうまく盛り込むことのできなかった特異で雑多な風俗の日欧比較を列挙する第 14 章(最終章)に現われる一項――

我らの間では、立ち去るときや、あるいは、外から戻ったとき、抱擁を行なうのが習わしだ。日本人はそういう習慣をまったく持たない。むしろ我らがそれをやるのを見ると顔を見合わせて笑う。

ジョゼ・マヌエル・ガルシーアの校訂テキストから原文を引用すると――

Antre nós se usa de abraços ao despedir ou vir de fora; os Japões totalmente o não usam, antes se riem quando o vêem fazer.²

² Luís Fróis, *Europa-Japão. Um Diálogo Civilizacional no Século XVI*, ed. José Manuel Garcia, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1993, p.167.

パトリシアに助けてもらって学生たちの入寮手続きが済む。その日は少々きつかったけれど、コヴィリヤンの第一夜を記念するため、あり合わせの食べものやヴィーニョ(葡萄酒)をかき集め、尾河先生宅でささやかに祝宴を催す。ひとしきり盛り上がったところで、団長(私なのだ)からの訓示。一杯機嫌で教育的指導をやるのはいかになものか、なんて少しも思っちゃいないのだ。訓示といっても、休まない、遅刻しない、諦めない、というだけのことで、日本にいたるときから言い続けてきたことの繰り返し。その後は1970年代から1980年代に沸き起こったブラジル・ブームに関するバカ話(バカ話ではあってもヨタ話ではない。すべてきちんと“史実”にもとづいている)。たとえば――

40名弱の同窓生は、男である限り、鉢植え式に、ただポルトガル語をやったというだけで――だけ、というのは少々ひどくろうが――ブラジルへの即時派遣要員として、いともカンタンに就職できたという話(ああそんな時代もあったのだ)、月給取り志望にとってはそういうまことにユルくも幸福な時代であったから、就職後しばらくしてブラジル送りになったやつが最初に習い直したポルトガル語動詞が *esquecer*(エスケセル。忘れる)だったという話――むろん「ゼンプワスレタ」とポルトガル語で言い訳するため――、鉢植え式といえ、かくいうワタシさえ、あやうく IHI(ブラジルでの通称イシブラス)などという企業に鉢植えにされかけた話、ネクタイ背広その他の緊縛グッズ(アイテムか)が苦手なので、と伝えてもらい、就職係に惜しまれながらそれを断わった話。学生の頃に米国西海岸でマリファナを覚え、それでもヤシカ(現、京セラ)みたいな“優良企業”にラクラク就職し、サンパウロ駐在員になったのはよいが、地道なおつとめが馬鹿馬鹿しくなり、シャブ仲間との交遊^{ざんまい}三昧から、ついにはハンパナクやばい宝石取引(ブラジルは世界有数の宝石産出国)に手を出し、あげくの果て、かねをめぐるいざこざに巻き込まれ、敵の放ったプロの殺し屋に殺されちまった●◎くんの話。殺される数カ月前●◎くんをサンパウロのアパートメントへ訪ね、ぼんやりとした不安をシンミリ語り合った長い夜の話……。

8月1日(月曜日)。いよいよ開講日である。受講にはネットに接続されたパソコンが必携である旨事前に周知徹底していたから、そのようなパソコンを持ってこないという者は、今回はいなかった。2009年と同じように、この日、皆のネット環境を整備する手伝いをしてもらうため、情報センタ

一のようなところへ皆がそれぞれの PC を持ち込む。当然手伝いが必要になりそうだという予感がしたので、私も最後まで現場にとどまり、さらに、整備された PC 環境が実際にレジデンシアで適用可能かどうか、までを見届けたわけだが、その場でどうにも理解に窮するできごとが起こった。

学生レジデンシアへ戻り、皆を集め、ふと見るとカズキが手ぶらである。どうしたと訊くと、おのれの PC をひともあろうに、尾河先生のリュックに詰め込み、私がまとめて担ぎます、と言うのならまだしも、何と尾河先生に担がせ、オノレは手ぶらを決め込んでここまで戻ってきたのだ。しかも往路からそういうことをしていたらしい。どうなっているのだ、こいつの神経は。今思い返せば、情報センターを出てから尾河先生のリュックがやに膨らんで重そうな、とは思っていた。でもまさかこんなことが起こっているとは思わなかった。我に返り、数十年ぶりくらいに、声をアララげる。

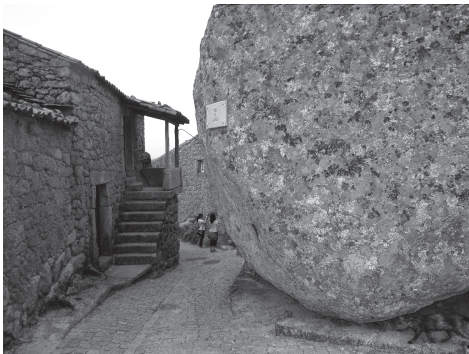
尾河先生に対しその場で重々謝罪したことは言うまでもないが、授業が本格的に始まって後もしばらく、先生がわが隣家へ帰宅なさるたび、カズキですけど、きょうは何ぞ無礼なことやりよませんでしたか、と訊ねるのが日課になってしまった。ハタチに満たぬ若造が五十路をとうに超えたヨーロッパ文藝評論の大家に己の PC を担がせる——。原発ムラのならずもの諸君が言う「想定外」とは違う。この行為は私にとって本当にウソイツワリなしの「想定外」である。

尾河先生は、カズキというのが何かスペシャルな学生なのかとでもお思いになったのか、何もおっしゃらず、大学と学生レジデンシアとを結ぶ急坂を上り下りなさったわけだ。スペシャルどころか、カズキが「リユーガクダケド、マダ、モーシコミ、マニアウカナ」(出発がかなり差し迫った時期にこれが突然話しかけてきたときの言葉遣い。まあ大体、こんなふうだったと記憶する。語源不詳ながら、これがタメグチ、か)とか言いながら近寄ってきたとき、思わず、ダレヨ、オマエ(授業で見たことなんかないから)とつぶやいたくらいだ。ともかくカズキは、顔を真っ赤にしている私を前にして、オット、モーシワケナイ、とか何とか口にしたようであったが、顔にたかったハエを振り払うときに生ずるであろう表情の揺らぎすら、その能面のようなツラに起こらぬのが、気色悪くてしょうがなかった。

ともかく授業初日からこういう人災(?)に遭遇して、これから一ヵ月、さがが思いやられる、思ったことではある。

だがそんな^{あんたん}暗澹たる思いも、みずからのアパートメント(ひとり住まいには贅沢な広さ)へ戻り、ケイジョ・ダ・セーラ(セーラ・ダ・エストレラ特産のヒツジ乳製チーズ)と、アレンテージョ地方モンサラース産ヴィーニョ・ティント(赤ブドウ酒)などベランダへ持ち出し、涼やかな風に吹かれつつ、暮れなずむコヴィリヤンの街と、周辺の山々の夕景に見とれていると、さっきの不快感などどこへやら、極上の幸福感に満たされてしまうのだから、我ながらタワイがない。

レジデンス・デ・ドセンテス。世界から UBI へ集まる教員・研究者へ宿泊の便宜を与えるため建てられた簡素だが快適な寮である。小さな家族なら充分暮らせる。2009 年に娘と過ごしたのと同じ建物であるが、今回はピーズ・ゼロすなわちゼロ層であった。ゼロ層に玄関があり、その横をレイトリーア(学長棟)と大学を結ぶ坂道が走っている。玄関とその道の間は絶壁のような窪みになっており、その真下へ建物が落ち込んでいる格好だ。出入りは玄関と道をつなぐ橋を渡ることによって行なう。道路につながる階を基準にここをゼロ層(日本風に言えば一階)とするのであるが、この建物は日本風にいうと実質的に地上 6 階建て。私や尾河先生の入居したアパートメントは日本の数え方で建物の 5 階にある。建物自体は丘の中腹に位置するから、アパートメントに入り奥へ進みベランダへの扉を開け放つと、下界にコヴィリヤンの新開地が広がり、さらにその向こうに連なる山々が爽やかに遠望できる。山々の尾根伝いに、ポルトガルの電力を 18 パーセントまでまかなう風力発電(electricidade eólica)用の巨大な白い風車が点在する。



その昔「ポルトガルで一番ポルトガルらしい村」というキャッチコピーを冠せられたモンサント。花崗岩(御影石)の巨大な自然石がそのまま民家、レストラン、カフェに転用されているさまは一見に値する



ソルテューリャにて



ソルテーリャの城壁にて。接吻しているように見える御影石の巨石がふたつ背景に見える。向かって右が尾河直哉氏の子息直大君

ベランダへの扉を全開し、アパートメントの入口扉を開け、さらに扉附近の廊下の窓を開けると、それはそれは心地よい乾いた涼風がアパートメント内を吹き抜ける。眠るときだけはさすがに入口扉を閉めたけれど、それ以外は風の通り道を作り、大らかに窓を開けて暮らせるヨロコビを味わう。空気がベタベタしておらず(ついでに放射能もなく)、蚊の侵入がまったくないから、こういうことができる。夜、蛾だのブンブンだの蜂だのは光に吸い寄せられて入ってくるが、別にそんなの平気だし、蚊に比べれば不快さにおいてものの数ではない。たとえ外が 35 度を超える猛暑であっても、アパートメントの中において直射日光を遮り、風の通路を作りさえすれば、クーラーなど本当に不要だ(2〜3 日ばかり例外的に暑苦しい日があったが、そういう日はむしろ雲の多い天気であった)。



アパートメントのベランダからはこんな眺望が広がっていた



レイトリーア(学長棟)からレジデンシアを見下ろす

今回の集中講座。2010 年が中止になった余波か、それとも私どもにポルトガル語を教えてくださいとリタ先生の名声を伝え聞いた学生が多かったせいか、受講者数は 40 名を超え 2009 年を倍以上に上まわる盛況であった³。しかも、イタリア語、スペイン語、フランス語など、ポルトガル語と同系統のロマンス諸語を母語とする学生たちの参加が目立った。東ヨーロッパで唯一ロマンス語圏に属するルーマニアからもひとり女子学生の参加があった。フランスからやってきたアンドレはドイツ国境に近いストラスブールの理工系学生。コヴィリヤンでの研修終了後、ポルトガルの最高学府コインブラ大学理学部へ研修の場を移し、一か年の滞在を続ける。とっつきにくい印象であったが、話してみると議論の大好きな楽しい青年であった(文法的なポルトガル語をゆっくり話してくれるので大助かり)。そのほかの学生の出身国は、チェコ共和国、ポーランド、スロヴェニア、エストニア、トルコ……という具合で、前回と異なり、英国とドイツからの参加者はなかった。

語学の授業は 40 人以上一纏めでは無理である。そこで今回は 2 クラスが開設された。まずポルトガル語と親近性の強い言語を母語とする学生がリタ先生のグループへ吸収され、上級コースと位置づけられた。それ以外の、ポルトガル語とは言語的類縁性の薄い言葉を母語とする学生たちはどうなったか。彼らは、リタ先生がこの講座の応援要員としてわざわざリスボアの高等学校から

³ EU 圏におけるポルトガル語学習の盛況ぶりに歩調を合わせるかの如く、日本でもちょっとした吉報があった。

私ども語学学習者にとって大学書林という出版社の名はつとに近いものであるが、2011 年 11 月 7 日付『日本経済新聞』によると、55 カ国語以上の研修に対応している DILA——大学書林国際語学アカデミー——が企業や官公庁から受注した講座時間数の 2010 年ランキングでポルトガル語は 3 位に躍り出たということだ(ちなみに 1990 年は 6 位、2000 年は 9 位であった)。英語と漢語(中国語)の首位争いは当分続くであろうか(ちなみに 2010 年の上記ランキングでは漢語が英語を抜いた)、この二言語を一旦棚上げにするなら、ビジネス需要の観点からという条件つきではあるけれど、ポルトガル語は実質首位に躍進したと言ってよい。ポルトガル語に次ぐ 4 位はロシア語だそうであるから、やはりこの趨勢は BRICs と呼ばれる新興成長国におけるビジネス需要の伸長を反映しているということなのであろう。

呼び寄せたフィリーペ先生の受け持ちとなった。

フィリーペ——親しみをこめてこう呼ぶ——は高校では「国語」教員として教鞭をとっている。ただしリタ先生と同様、「外国語としてのポルトガル語」教員として正規の研鑽を積んだ方である。見るからに感じのいい青年教師で、体格はチャンコ型のお相撲さんそのものであり、ユーモラスな存在感が好ましい。

両クラスとも同一の教材を用い、教える内容に基本的な差異は存在しない。リタ先生は、進行のスピードを上げ宿題の量を増やすことによりフィリーペの初級クラスとの差別化を図ることにする、とおっしゃった。

そこで問題となるのは、わがニホン人グループである。どちらのクラスに入れてもらうのか。尾河先生は当然上級コースに入るとして、本学生たちは？ リタ先生は、いろいろ熟慮したが、ナオヤ（尾河直哉）もともと彼らを私のクラスへ吸収する、とおっしゃった。それでよろしいのですか、と念を押すと、ミズキにせよ、サヤカにせよ、カズキにせよ、予想される授業へのツイテコレナサは、少なくとも当分の間、私のクラスでも、フィリーペのクラスでも変わらないだろう、だったら、3 名のようすをヒロシへ遠慮なく伝えるため、いっそのこと彼らは私のクラスへ吸収したほうがよい、という御意見であった。

特別な計らいはこれだけではなかった。いよいよ最終的な成績評価の段階になり、リタ先生は本学生たちの評価を、フィリーペの初級クラスを受けたものと仮定して、というか、微調整を施したうえで（要するに下駄をはかせて）行なってくださったのだ。その結果もらった得点 (valores) はサヤカ 12 点、カズキ 13 点、ミズキに至っては 14 点 (20 点満点)！ こんなに甘くなさらずとも、と思ったが、ミズキとサヤカに関しては、アタリマエのことながら、また、私との当初の約束どおり、完全なる無遅刻無欠席を守ったから、それぞれの *esforços* (efforts. 努力。これも成績評価の重要項目) を認めてくださったのであろう。確かによくやったから（そう断言できるのは、彼女らがかなりの分量の宿題をわがアパートメントで片づける、その作業の現場に私はつききりだったから）、私も素直に喜ばいいのかもかもしれないが、特別な計らいを重ねてくださった末に導き出された成績であることは確かであって、それ

再び、外国人のためのポルトガル語夏季集中講座見学の記

を忘れてもらっては困る。それにしても、このように相手の力量を的確に見定め、杓子定規ならざる対処を施す、何ともニンゲンの匂いがする評価方法ではなからうか。

今回の時間割は別掲のとおり。Aulas とあるのが授業である。2009 年は午前・午後ともに授業が行なわれるのは木曜日に限られたが、今夏は開講期間が 3 日短縮されたうえ、聖母被昇天の祝日(8月15日)が月曜日とダブったこともあって、ほぼ毎日、午前・午後、昼食をはさんでぶっ通し、2009 年よりはるかにタイトな授業日程が組まれた。さらに内容豊かな課外活動が加わり、それらのすべてにリタ先生もフィリーペもおつき合いくださるのである。

HORÁRIO / SCHEDULE

Horas	Segunda 1	Terça 2	Quarta 3	Quinta 4	Sexta 5	Sábado 6	Domingo 7
9h 20m		Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
10h		Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
11h	Recepção	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
12h		Aulas	Aulas	Aulas	Mini-teste		
13h							
14h	Aulas					Actividade	
15h	Aulas	Visitar a Covilhã	Visitar Castelo Novo	Aulas			
16h	Aulas			Aulas			
17h	Aulas			Aula	Piscina		
18h							
Horas	Segunda 8	Terça 9	Quarta 10	Quinta 11	Sexta 12	Sábado 13	Domingo 14
9h 20m	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
10h	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
11h	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
12h	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas	Mini-teste		
13h							
14h						Visitar Belmonte	
15h	Aulas	Visitar Castelo Branco	Aula	Aulas			
16h	Aulas		Aulas	Aulas	Piscina		
17h	Aulas		Aulas	Aulas			
18h							
Horas	Segunda 15	Terça 16	Quarta 17	Quinta 18	Sexta 19	Sábado 20	Domingo 21
9h 20m		Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
10h		Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
11h		Aulas	Aulas	Aulas	Aulas		
12h		Aulas	Aulas	Aulas	Mini-teste		
13h							
14h	Visitar a Serra da Estrela					Visitar Monsanto e Penha Garcia	
15h		Aulas	Actividade Passeio Fotográfico	Aulas			
16h		Aulas		Aulas	Piscina		
17h		Aulas		Aulas			
18h							

HORÁRIO / SCHEDULE

Horas	Segunda 22	Terça 23	Quarta 24	Quinta 25	Sexta 26	Sábado 27	Domingo 28
9h 20m	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas			
10h	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas	Exame		
11h	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas	Exame		
12h	Aulas	Aulas	Aulas	Aulas	Exame		
13h						Visitar Almeida	
14h							
15h	Aulas	Sortelha	Aulas	Aulas			
16h	Aulas		Aulas	Exame			
17h	Aulas		Aulas	Exame			
18h							
Horas	Segunda 29	Terça 30	Quarta 31	Quinta 1	Sexta 2	Sábado 3	Domingo 4
9h 20m							
10h	Aulas						
11h	Aulas						
12h	Aulas						
13h							
14h							
15h							
16h							
17h							
18h							

Atenção: As actividades culturais e lúdicas realizam-se durante as tardes livres e sábados. Os alunos serão avisados sobre o tipo de actividade, destino e hora de partida com antecedência. Algumas actividades dependem de marcação e confirmação.

Warning: The cultural and recreational activities take place during the afternoons and Saturdays. Students will be warned about the kind of activity, destination and departure time in advanced. Some activities require reservation and confirmation.

De 1 a 29 de Agosto de 2011

De 1 a 29 de Agosto de 2011

授業と課外活動の時間割



コヴィリャン市のすぐ背後に広がるセーラ・ダ・エストレーラ。標高こそ高くはないが氷河の刻んだ荒々しい山容が印象的だ



セーラ・ダ・エストレーラの岩場。攀じ登っている学生が見える



ポルトガルの最高地点(海拔1993m)までUBIの手配したバスで連れていってもら。尾根伝いに並ぶ風力発電用の風車を遠望する

私自身気が向いたとき、というより、ポルトガル語に関する質問が少々たまった頃とか、リタ先生に何となく逢いたくなったときを選んで授業参観へ出かけたのだが、ややノンビリしていた2009年より、授業参観の頻度はどうしても上げざるを得なかった。前回は初級コースだけで、しかもタケンが唯一の参加者であったという気楽さもあったのに対し、今回は慌ただしさが違った。

前回に関しては、初級ポルトガル語の説明がリタ先生のみごとな英語でもって行なわれることを報告したが、今回はスペイン、イタリア、フランスの学生が大勢を占めたせいもあろうか、英語を介しての説明の比率がぐっと小さくなった、という印象を受けた。解説はストレートにポルトガル語で、という方針である。でも、補助的な説明には適宜英語が用いられた。だからある程度の英語の語彙は必要だし、基本語彙くらいマスターしていることが、ポルトガル語の学習をどれだけ助けるか

知れぬのだが、サヤカもミズキも、英語の勉強はやってきませんでした、と言う。割合にであるがよく勉強するミズキに、ポルトガル語の比較級・最上級を英語のそれと対比しながら教えようとする、英語でそんなの習った覚えはない、知らない、と言う。英語の文法知識を活用することがどれだけポルトガル語文法の理解を助けるか……。出発前、せめて中学時代の英語テキストくらい見直しておくよう命じたのだが、コヴィリャンに来てしまってからそんなこと悔やんでも始まらない(まさに、ゆとり教育のギセイシャであり、そのギセイシャを生んだ責任は明らかに我々にある)。とにかく諦めたら一巻の終わりである。

授業が始まったばかりの頃、買い物の帰路、授業のインテルヴァーロ(休憩時間)に立ち寄ってみると、サヤカがリタ先生と教室のベランダで立ち話をしている。英語による説明がわからない、このさきどうなるか不安だ、というふうなことをリタ先生に訴えているようであった。お節介とは思ったが、知らんぷりするのどうかと思い、私は割って入り、今からアキラメていたのでは話にならぬ、わかってはいてもわからなくても、授業中はとにかく徹底的にノートをとれ(リタ先生の板書の文字は大変丁寧で美しい。筆記体はお使いにならなかった。筆記体といえば日本の教壇で筆記体を書けなくなっても何年になるだろう。そこそこきちんとした筆記体を書く自信はあるのだが、そんなもの授業では一行たりとも書けない。書いたらたちまちブーイングの嵐になるから。私らが中学生のとき習った筆記体など誰も教わっていないであろう)、会話はおかしいことしゃべってアタリマエなのだから、恥ずかしがらず口パクをやって——授業中でも——「無言の音読」をやれ、というふうな助言をした記憶がある(音読うんぬんについては改めてふれる)。

繰り返しのようになるが、今回の旅に尾河先生が同行してくれたことは、私のかけがえのない財産となった。毎日のように共にしたわがアパートメントでの晩飯の場で(他の3人も一緒であることがほとんどであった)、リタ先生を交えた食事会の席で、旅先のカフェで、兼好法師ふうにいえば「おなじ心ならむ人」と話し込んだ時間は、文字どおり至福のひとつときであった。



大学近くのレストラン「カーザ・ダ・リベイラ」にて。リタ先生と話し込む尾河直哉氏

ある日、いつもどおり愉快的な会話でひとしきり盛り上がった後、話題は、自然の勢いで、どうしてもポルトガル語そのものやヨーロッパ文化論みたいな高尚な(?)テーマへ突入してゆく。尾河先生は優れた言語センスの持ち主であるから、ポルトガル語会話が相当お上手なことに私はさほど驚かなかったが、それでも難行苦行であったとおっしゃっていたのは、あの聴き取りにくい、皮肉交じりに言えば、わざとわかりにくくしていると思えぬようなポルトガル式ポルトガル語の聴き取りであった、という。

日本で毎晩6時に流れていた在日ブラジル人向けNHKのポルトガル語ラジオ放送のあのわかりやすさ(その大きな要因のひとつとして、当該番組がもっぱら日本関係の時事ニュースを扱っており、アナウンスされていることの内容的背景が一応理解できている、ということを挙げうるのだが)に比べれば、ポルトガルのポルトガル語はスピード速く、母音の子音化もかなり顕著であり、ブラジルのポルトガル語とは明らかに外面的様相を異にする。特に聴き取りにくさが際立つことは確かだ(外面的様相の差異にもかかわらず、ブラジルのポルトガル語は、これまた紛れもないポルトガル語にほかならず、ブラジル語と呼ぶものは存在しない。発音・語彙・構文の諸相において15世紀末～16世紀の古いポルトガル語の特徴をより色濃く残しているのはむしろブラジル式ポルトガル語のほうである。そのような言葉をブラジル語と呼ぶわけにはゆかない。ふたつのポルトガル語がまったくの別物というためには、双方間に文法のうえで本質的かつ決定的な隔たりがなくてはならないが、そんなものは断じて存在しない)。

ちなみに尾河先生の収めた成績は上級コースで15点。ポルトガルでは卒業試験で17点もと

れば最優秀成績者になれるそうだから、これはこれで充分すばらしい成績なのであるが、それでも減点されてしまったわけを探すとすれば、その原因は、本人も認めていらしたとおり、聴き取りテストにほとんど歯が立たなかったことにあるようであった。加えて、毎回のトラバーリョ・デ・カーザ(宿題。週末に課される自由作文)で、プロのエッセイスト顔負けの健筆を尾河先生がポルトガル語で揮^{ふる}ってくることに對し(尾河先生はみごとな日本語の書き手であるからこそ外国語も達者なのだ)、リタ先生がヤルワネ、コノヒと言わんばかりに、つまり力量相応にリタ先生が尾河先生のお相手をなさったことも上記の得点にとどまったことの要因だろう、と私は見た。言い換えれば、完全なオガワ基準でリタ先生は本気の成績評価を下したのだ。

ポルトガル式ポルトガル語の聴き取りにくさであるが、これは決して私だけの印象ではない。1981年に教えを受けたブラジルの優れた国語学者グラッドストン・シャーヴェス・デ・メーロ先生(当時、フルミネンセ連邦大学文学研究大学院教授)も、私に同様の体験談を語られた。はっきり記憶しているが、話すスピードの速さに馴染むまでポルトガルに入ってから一週間くらいはかかったよ、と。ブラジル最高の知識人がそう告白なさるのだから、私どもは少々安心してよいのだ。さらにこのたびは、隣国イスパニアから大勢の学生がコヴィイリャンへやってきたのだが、ポルトガル国境に近いシウダー・ロドリゴに暮らすクララに訊ねてみると、読むことも書くことも話すことも、そこそこ大丈夫(客観的に見てイスパニア語とポルトガル語とはやはり瓜ふたつの言葉である)、でも、完璧な聴き取りとなると少々辛い、と愛想よく語ってくれた。



レストラン「カーザ・ダ・リベイラ」でのひとコマ。前列中央がクララ。愛くるしい simpática な女性だった

先述したとおり、2009 年に比べて今回はややハードな進度で授業は行なわれたし、本学生たちは授業に出ているだけでは到底ついてゆけず、したがって私には補習を行なう者としての役割がハナから期待されていた。連夜わがアパートメントで行なわれた「大」をつけたいほどの勉強会にミズキもサヤカもカズキも、オラーとか言いながら姿を見せる。本当はベランダに椅子など持ち出し瞑想に耽りたい気分の日もあるのだが、自発的にやってくる連中をムゲに拒むわけにはゆかぬ。



リスボアへ戻ってからはレンタカーで少々遠出した。アレンテージョ地方エーヴォラへ向かう国道脇に車を停め、コルク畑を見る。アレンテージョだけで全世界のコルクの約半分を産する

尾河先生の充実したフランス語を受講して動詞の活用やら語尾の変化やらの概念に多少親しんでいるミズキとは異なり、そのような概念に馴染んだことのないサヤカは大変である。ミズキとサヤカとカズキが思い思いの場所に陣取り、テキストとにらめっこを始める。私はむろんリクエストがあるまで放っておく。100 万ユーロの夜景を肴^{さかな}にベランダへ出モンサラース産ヴィーニョ・ティントなど傾けて、さ、陶然たる気分浸らんとしたところで、大体そういうタイミングを見計らったかのように、「お呼び」がかかる。「お呼び」をかけたひとりひとりへバッチリ個別レクチュアを行ない、愛用の極太顔料ペンで、彼らの——特にサヤカの——ノートブックに重要事項を書き込んでゆく。ひとしきりそれが済むと、彼らは皆、無言の行へと戻る。シンと静まり返る、真剣そのものの雰囲気……と言えば聞こえはいいのだが、私はちょっと違和感を持つ。彼らはコトバを勉強するに際し音読を行なう習慣を有していないのではあるまいか。アパートメントは充分ゆとりある広さだし、少し

離れ離れになったら仲間に迷惑はかからない。繰り返しテキストを音読していれば発音など自然に身についてしまうと思うのだが。

私が文書の解題やエッセイでしばしば引用するルイス・フロイスの『日欧文化比較論』という小冊子がある(本稿でも「抱擁の挨拶」に関する一短文を引用した)。1585年に書かれたものだが、群を抜く内容的面白さと、文章そのものの平易さに着目し、この中から最もやさしいものを厳選してポルトガル語の平常試験問題に用いている。多くが80点を超えるような高得点を取るのも、これは甘すぎだ、ちょっと目先を変えてやれ、と思い、秋学期第一回の平常試験には、ボサノヴァの名曲『ガロッタ・デ・イパネマ——イパネマの娘』と、ジョアン・ジルベルトが歌う『ア・フェリシダージ』を試験問題に取り上げ、それぞれの歌詞に出てくる動詞を用いての短文作りなどやらせてみた。

ただ当初はもう少しエゲツナイことを考えていた。つまり、上記の曲の歌詞全部か数節を丸暗記して書き出せ、それがいやなら、ア・カペーラで歌え、という出題である。そういうの、皆どう思う、と一応、相談を持ちかけたのだが、ダメです、そんな記憶力ありませんと、皆、口をとがらせる。記憶力アリマセン、なんて言わないで、暗記用の脳細胞ならあらかた消滅してしまっているワイ(私)でさえ20回聴いて20回口ずさんだら、自然に覚えたで、と声を励ますと、ウチらそんなヒマ人じゃありません、なんてイヤミを言う。ともかく、『ア・フェリシダージ』の一節を見よ(訳は私がつけた)。

A felicidade é como a pluma que o vento vai levando pelo ar.

フェリシダージ——幸せ。それは風に巻かれ空を舞う^{くう}羽毛の如し

Voa tão leve;

軽やかに^{そら}宙を飛ぶも

Mas tem a vida breve;

その命^{はかな}儚く

E precisa que haja vento sem parar.

風やまず吹かねば空しく地へ落つるのみ

ア・フェリスイダージ・エ・コモ・ア・プルーマ・キ・オ・ヴェント・ヴァイ・レヴァンド・ペロ・アール

ヴォーア・タオン・レーヴィ

マス・テン・ア・ヴィダ・ブレーヴィ

イ・プレスイーザ・キ・アージャ・ヴェント・セン・パラール

ジョアン・ジルベルトのささやくような、けだるそうな、聞きようによっては寝言でもあるかのような歌声。繰り返し聞いて繰り返し口ずさんだら、絶対覚えられるて、ともう一度皆を鼓舞したが、とにかくウチら、口に出しても覚えられないものは覚えられません、英語も国語も声に出して勉強したことアリマセン、の一点張り。私はそこで、ああヤッパリ、と思ったのだ。日本語にせよ外国語にせよ、音読の習慣を身につけ損ねたとは、とにかく気の毒の一語に尽きる⁴。

⁴ 下に掲げる文章は、井上ひさしが母校の上智大学で2001年10月から4回にわたって行なった連続講演の一節である。

「日本語は全部母音で終わります。ですからきちんと発音すると、とても大きな感じがして美しいのです。外国人はみんなそう言います。それに強弱のアクセントがなくて等リズムですから、聞いているとタッタッタッタッタと、こういう感じなんです。

ぼくが子どものころ、みんなで声を揃えて教科書を読むという授業がありました。国語の教科書の新しい章が始まると、遠藤先生というとてもいい女の先生だったのですが、その先生が、まず生徒たちに『これを読める人はいますか？』とききます。すると、ぼくのようなそそっかしいのが手を挙げて読むわけです。そうすると先生が「いま〇〇君が読んでくれたけど、ここがおかしかったね」というようなことを指摘して、『それでは今度は先生が読んでみます』と言って、先生が読んでくれる。次に、『みんなで先生と一緒に読みましょう』ということになって斉読します。こういうことを何回も繰り返してやるんですが、そうやっているうちに、子どもたちは日本語の発音を自然にしっかり身につけていくわけです。

いまの小学校の国語の時間を見ると、そんな授業はほとんどありませんね。教科書の文章自体が、非

ところでミズキとサヤカであるが、ふたりは実は私のポルトガル語の学生ではない。

ミズキは私の教養諸学を新松戸で 2010 年度に履修し、偶然にも今、尾河先生のフランス語の授業を受けている。それがなぜコヴィリャンへ、というのは話したら長くなりそうだが簡単には述べておく。

ある日の教養諸学の授業。経済成長著しい南アジアの雄インドネシアなどこれからおもしろそうだが、あっちで働く場合、幹部連中となら英語によるコミュニケーションで充分だろうが、ディープに社会に溶け込むため、より大きなシェアを取るため、一流と称される企業もきちんとインドネシア語の現地研修を課しているようだが、学生時代にこんな言語を——つまりあまりひとのやらないことを。コトバに限らずともよい——ひとつ得意技にしまったなら、世間はほおっておくまいよ、と皆をけしかけた(ちなみに、上記 DILA の 2010 年受注時間数ランキングでインドネシア語は 8 位)。要するに英語では絶対入り込めない世界が存在するぞ、しかもそうした世界の範囲は今後ますます広がるぞ、と訴えたのだ。

交通遺児育英機関のあしなが育英会がブラジル、インドネシア、ウガンダの 3 ヲ国に青年を送り込みワーキングホリデーのチャンスを提供していることを知っていたし、現に本学の学生ふたりがこのプログラムにのっとってそれぞれブラジルとウガンダへ派遣された実績があるので(ブラジルへ派遣された学生には私が直接関与した)、決して皆にとっても雲をつかむような話ではない、具体的なチャンスがある、と話を結んだ。

この話に喰いついてきたのがミズキである。インドネシアに興味湧いてきたので、あしなが育英会に関するプログラムへの応募手続きを詳しく教えてくれないか、と私に頼んできたのだ。ミズ

常に腑抜けたものばかりで、ぼくのものでさえ載るんですから(笑)。気の抜けたエッセイとか、そういうのがいっぱい載っていて、音読してもおもしろくないのです。日本人が長い間伝えてきた日本語、たとえば『祇園精舎の鐘の声……』でも『最上川……』でも『春は曙』でもいいから、そういう文章を先生が読み、子どもたちに読ませることが大切だと思います」(井上ひさし『日本語教室』新潮新書、2011 年、142～143 頁)。

キには、英語みたいにライバルだらけのところで競争やるより、こういうフェイントかけたようなところのほうがおもしろいし、現実的にも——ありていに言えば、就職のためにも、ということだが——有効性が高いぞ、とダメ押しのソソノカシを行なう(フェイントうんぬんとは言ったものの、ブラジルの言葉もインドネシアのそれも堂々たる世界の大言語であって、奇を衒^{てら}うような、ひとの意表をつくような特殊言語ではまったくない。特殊と思うひとがいるなら、それはそのひとの世界認識に深刻な誤りがあるのだ。モチベーション皆無のまま英語のみ押しつけて結局絶望を深めさせるくらいなら、別の道を指し示してやったほうがよほど実利的かつ現実的、と申しておく。語学学習には、一握りの天才を除き、一種のタイムリミットがあり、だからなおさら選択の多様性は確保しておいたほうがいい。マイノリティー(?)言語に魅了されるような学生なら、一旦諦めた英語の学習にもきっと本気で取り組み直すであろう。そこで初めて英語の重要性を理解するであろう)。

改めてあしなが育英会に問い合わせたところ、これは今、純粹に交通遺児のためだけのプログラムへ変更されてしまったという。このプログラムを活用してウガンダで一ヵ年ワーキングホリデーを送った学生だが、実は流通情報学科の卒業生、そして彼は本物の交通遺児なのであった(ちなみにそのような体験を積んだ彼は“超氷河期”のこの御時世に何と幾つかの内定を取ったうえで某有名企業を選び就職した。まさにマイノリティー路線の勝利ではないか)。そのような事情説明を受けて私は納得し、あしなが育英会がらみのインドネシアゆきはどうか無理のようだ、とミズキへ伝えてやると、それならぜひポルトガルに、というふうに話が展開したのだ。

さらに彼女の友達のサヤカは出発日がかかなり迫ってから、ポルトガルの話をミズキから聴き、かなりの予備知識を仕込んだうえで参加を申し越してきた。サヤカに関しては、まったく未知の学生であるから、国際交流センターの公式面談にさきだって私は個人的に面接し、さらに、先方のたつての要望に応じて、母上とも面談したのであるが、そのとき私としては、難しい要求など何もアリマセン、絶対に遅刻しない、断じて欠席しない、のほか、本来参加資格のない流通経済大学生が、交流協定の締結校に所属する者の特権により、充実したプログラムへ無料で参加しうること、そのアリガタミを片時も忘れないでください、小生からの注文はそれだけです、よろしいですね、と念を

押した。帰国後母上からは、今回の研修に旅立たせて本当によかったという書状をもらった。むろん嬉しかったけれど、そりゃそうだろう、という程度の達成感は、本人を別とすれば、私が一番感じている。

コヴィリャンへ派遣する学生を最終的に選抜する、その権限は私などにはなく、国際交流センターが面接を行ないそこで可否の判断を下す。聞くところによると、カズキは本学に稀にある不本位入学というやつで、そもそも私のポルトガル語の授業になど登録だけしてほとんど出席していない。春学期第一回平常試験(授業中にしかやらない)など、終わってしまってから、アア、ソンナノアッタデスカ、という調子だ。だからいきなりこの集中講座に参加を申し越してきて、ダレヨ、オマエ、とつぶやいたことは上述のとおり。そんなのがなぜ、と思うのだが、こういう、他大学では絶対享受することのできぬ宝物そのもののチャンスを活用してキャリアに磨きをかけ、不本位ならざるところへ晴れて入学し直したときの財産にしたいのだそう。よろしい。そのための協力ならいささかも惜しむつもりはないが、曲りなりにも留学を希望しておきながら、辞書に関する相談までネグレクトするとは、一体どういう料簡だ。

辞書に関する説明を授業の一回目に行なうことは毎年の恒例であり、それを実行し、先方がろくに授業に出てこない以上、あとはほおっておけばいいわけだが、いよいよ出発が一週間くらい前に差し迫ると、いてもたってもいられなくなるのが、オヒトヨシの悪いクセだ。お節介なことに、辞書どうする、コヴィリャンでおれから借りるつもりだろうが、貸し出しなんか絶対 NG だぜ(惜しいわけではない、四六時中必要だから困る、というのだ。ひとときでさえはぎ取られると本当に困る。また、こんなのに限って、早く返せ、と催促すると、なぜそんなウルサクユーノデスカ、なんて開き直るのである。同じ目なら別のところで遭って懲っているから、同じ轍^{ワダチ}は踏みたくない)と伝えると、飛び込んだ本屋でたまたま見つけたのを買ったきた、と言う。で、差し出したのを見てみると、何とそれが和葡辞典。ドリブルするを driblar という、なんてことは書いてあるが、コヴィリャンで配布されるテキスト——そこそこのポリュームがあり、初歩のポルトガル語を平易なポルトガル語で説明してある——を、この辞書を用いてどのように読み、どのように理解する気なのであるか。仕方ないから、連夜の「大」勉強会でカズキ

がアパートメントに現われたときに限り、白水社の葡和辞典を使わせる。

前述したトラバリーヨ・デ・カーザの添削を一度だけしてやったことがあるのだが、口頭でブツブツ話させてみると、まあこんなことを言いたいらしかった。①日本の有料テレビでポルトガルのスーパーリーガ(ポルトガル一部リーグ。もちろんフットボール *futebol* のこと)を視聴できるようになった。②だが解説者やアナウンサーのポルトガル語がまったく理解できない。③だからこの機会を利用して彼らのポルトガル語がわかるようになりたい(辞書も持参しないで、よくまあ、と思う)——。ただ、内容に関してはシャカリキになって向き合うようなシロモノではないし、それに、これはポルトガル語の“自由”作文であって、別段内容を精査されるたぐいの硬質な文ではない。だから、リタ先生が苦笑なさる内容であっても、少々ウソハッタリを交えて書いたって構うまい、と私は思う。それどころか、限られた字数で、コントのようなおもしろさというか、奇想天外な内容を有する文章が書ければなんとすばらしいだろうと思う⁵。

ともかく、スーパーリーガうんぬんに関するトラバリーヨ・デ・カーザでは、適当に枝葉を茂らせ、不要な箇所の刈り込みを行ない、私が代わって仕立ててしまった。それ以降カズキは自信をつけ

⁵ ちょうどこのあたりを読み直しているとき、「活字文化フォーラム——社会に生きる漢字の力」(日本漢字能力検定協会、読売新聞社主催)が11月13日に催されたという記事が『読売新聞』2011年12月18日付の特別面に出た。パネル討論に参加した浅田次郎が、司会者の「読書と書くことの出会いを伺えますか」という問いに答えてこんな発言をしている。

「子供のころに、読むのが好きで、『読んでこんなに面白いものだったら書いてみよう』というような発想から書くことを始めたと思うんです。だから、学校で作文書けというのと、自分で物語を書くということは全然別ものだと思っていました。小学校の時に先生に、『うそを書くな』と怒られた記憶があるんですよ。普段、自分でノートにうその物語ばかり書いているから。中学生になってから、自分の読んだ本の改竄^{かいざん}をよくやりました。はっきり覚えているのは川端康成の『伊豆の踊子』。帰りの船の中でめそめそと大学生が泣くというのが許せない結末だったので、自分で書き直して、クラスで回しましたね。やっぱり最後は、下田の港で抱き合って熱い口づけを交わさなければウソでしょう」

たのか、そういう教えるのがイヤなのか、その後の作文はカズキ独自のものになった。たとえば、オラー、みんな、俺はカズキだ、カズキと呼んでくれ、初めの頃はいろいろと *dificuldades* があつたけど、今は *muito bem* だ、とかいう内容だ。2009 年に参加したタケシのポルトガルにおけるザバイバル術に関する“自由”作文「ポルトガル語を話す！ 英語を話す！ ニコニコ・コミュニケーション！」(タイトルにあらず。本文がこれだけ)と辛うじて異なる点は、SVO なり SVC なり構文らしきものが成立していることだが、まあ、だから、それでどうした、というしろものではある。

無知を自覚し、博雅の士に教えるを乞い、存分にそれを吸収し、教わって満足したら感謝と喜びを全身で表わす、という態度ほどトクなものはないことを、私は学問の末席に連なる者として無上の経験智とし、みずからこれを励行しているつもりなのだが、カズキは一体何にプライドを持っているのか、個人レクチュアをしてやっていると、ひたすら聴くのではなく、ア、ソレ、ワカッテマス、とかいう反応でときおり話の腰を折る。教えていただくことに対するこうした謙虚さの不足は、何も私だけの印象ではなく、リタ先生によると、カズキは、ミズキやサヤカに比べたら英語による説明がよりよくわかっているようだが、きちんと記憶すべきことを記憶してゆこうと細やかな努力を払わない、困ったことに、ハッキリ憶えてもいないことを、ブツブツ不明瞭に口ごもることによって発音へ玉虫色の煙幕をはりめぐらし、何となく正しく見せかけようとする、と。もっとハッキリ、明瞭に、しゃべりなさいと、リタ先生は何度かカズキを注意なさった。先生は私に、カズキだけど、初歩者なのに、何を理由に、ああして自分を“高く”見せたいのだろう。そんなゴマカシやったって百戦錬磨の教師に通じるはずなのに、とおっしゃった。リタ先生の鋭く正確な指摘に、ウーンと唸らざるを得なかった。私も——尾河先生も——うすうす感じていたことをびしっと指摘されてしまったのだ。



コヴィリャン市内のレストランにて。リタ先生に懐く amizade
と respeito のあかしとしてコメンダドール章を掛けていただく

学んだことを易しくおもしろく伝えたいという気持ちにおいて、私は人後に落ちぬつもりでいる。教えることが三度のメシと同じくらい好きという態度も、数十年来変わらない。教えることは同時に、私にとって無知の発見の場であり、教えているさなか知らないことが出てきても、間違いを生徒に指摘されても、そんなこと大いにありうると割り切っているから、全然暗い気分にならないし、恥ずかしくもない(開き直って堂々と大恥を一度かけばそれでよく、その印象はかえって強烈だから、それ以降、同じ間違いを犯すことはないのだ)。改善して次の一步へ進めばよい。

この問題に関連して、コヴィリャン滞在中、あろうことか、ミズキに教えを受けてしまった。実用的な会話表現に力点の置かれた 2009 年に比べ、リタ先生の今回の講座はかなり細かい文法事項にまで踏み込むのだなあ、という印象を持ったが(当然のことだが、会話にだって文法知識はたっぷり必要だ。それがまともな内容を含む会話であるなら)、ある日ミズキの宿題を見てやっていると、名詞を代名詞に置き換える練習問題の数々に出会う。すなわち *Tu partes a janela.*(君は窓を割る)という文中の女性定冠詞＋女性名詞 *a janela* を、代名詞(この場合、直接目的格/女性/単数)へ置き換える作業である。ミズキが正しく *Tu parte-la.* と直しているのに対し、私は、ちょっと待って、*partes* から *s* は落とすのか、とミズキにただすと、リタ先生はそう言いましたよ、と言う。青ざめて文法書と辞書を

繰ってみると、ミズキの言うとおり。ハイフンの後に代名詞を置く場合、動詞 *partes* の最後の *s* を落としハイフンでつないで、その直後の代名詞 *a* を *la* に変えるのだ。

私としてはこういう場合、語順の比較的自由なポルトガル語の特性を生かし、代名詞 *a* を *a* のまま変化させず動詞の前に置くのが好きだ。だから *Tu a partes*. をもつばら愛用してきて今に至っている。もちろんそれで正しいし、文の流れもそのほうがなめらかなのだが、そっちを偏愛するあまり、動詞の二人称単数の後、ハイフンでつないで代名詞を後置するときのキマリを、いい歳して、完璧にはマスターしていなかったのだ(ただし躊躇なく言うが、文法は昔も今も大好きである。しつこいけど文法無視してまともな内容を含む会話などあり得ない)。

ポルトガル語でどうぞよろしくを *Muito prazer em conhecê-lo*. (相手が女性なら *conhecê-la*) という。*conhecer-o* となるはずのところそうはせず *conhecer* の *r* を落としてハイフンでつなぎ、直後の代名詞 *o(a)* を *lo(la)* とすると、*Tu partes-a*. となるはずのところそうはせず *Tu parte-la*. に変えるのは、同一線上にあるルールだ。*Muito prazer em conhecê-lo*. は慣用表現であるから、無意識のうちにこの文法事項は頭に入っていたわけだが、*Tu parte-la*. に関してはそうではなかった。とにかく大恥をかいいたかわりに、その印象が痛烈なだけ、今後間違えることは絶対にはないと思う。

つくづくひとに教えることと、ひとから教わることは、表裏一体だと思うのだ。教えることは、学ばぬ限り不可であり(アタリマエ)、学ぶという営為はよりよく教えることで深まり、さらに誤りを犯したり、誤りを指摘されたりすることで、問題の理解はいつそう深化する。だから、最低限の基礎知識を踏み固めようとししないで、いわばお高くとまって、あやふやな知識を何となく正しく見せかけ逃げ切つてやろう——さっき述べたように、発音に玉虫色の煙幕をはりめぐらせてうんぬん、というのも、あれはあれ、カズキは懸命に考えてやっていることなのだろうが——なんて態度は、結局本当に損なのだ。

ポルトガル語を学ぶことに対するスタートラインからの不利ということを別にして、やはりヨーロッパの選抜された学生たちとのどうしようもない素養の差を感じてしまったのは、トラバーリョ・デ・カーザ(宿題)として週末皆に課される自由作文においてであった(作文はできるだけ多くの画像を附し、

皆、リタ先生へ週末のうちに送信する。リタ先生はそれを編集し、週明けにはネット上に公開、誰もが閲覧できるようにする)。

ヨーロッパの若い知性は皆が皆そうだとはいわぬが、自由作文ひとつ書くにも、実にノビノビと、楽しく、まさしく自由に、文章を楽しむ。何かを書くに際して、井上ひさしの座右の銘「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに」を、私は平素^{けんけんふくよう}拳々服膺しているのだが、それが完璧に——いや、少しでも、で構わない——実現できたらどんなにかすばらしいだろう。

イタリアはジェノヴァからやってきた土木工学生ジャコモとアンナ(ふたりは恋人同士らしい)共同の作文を見える。ジャコモとアンナが、なぜかカメラ目線で、レジデンスへ駆け込もうとしている。ふたりを追いかけているのは、どこからとも現われた猪(合成写真)。ふたりはこれにコントのような説明文をつける——。

世界的に著名な写真ジャーナリストであるアンドレ(フランス・ストラスブールからの参加学生。前述)が決定的な一瞬をとらえた。兇暴な野生の猪に追われ、寮へ逃げ込む私たち(ジャコモとアンナ)。ふたりして野外で宿題をやっていると、猪の不意打ちを受けたのだ。寮へ逃げ込んで猪を巻いたつもりになって、安心して私(ジャコモ)はアンナと一緒に自室へ。ところが猪はどうしてわかったのか、部屋の窓をブチ破って先回り。私がドアを開けると、血だらけになった猪がベッドでニッコリと微笑み、それを見たアンナは失神昏倒した——。

タワイもないと言えばこれほどタワイない話もないが、やさしい語彙だけでこういうコントのような作文を紡ぎ出すセンスに、私は羨ましさを感じる。

テレビがまだ大方白黒だった頃、『巨泉×前武のゲバゲバ 90 分！』という伝説的な番組があった(1969～1971 年)。90 分ひたすらコントだけ。今でも覚えているコントがある。女優の小川知子がなかなか来ないエレベーターを待っている。やっと来たエレベーター。ところが開いた扉のむこうにあったのは、上階へ上がる階段だった、というやつ。

ふたりの作文にはそういうコント作りの精神が生きているのではないかと思った。とにかく文字ど

おりの自由作文を書く技量が幼少時からの学校教育で培われているのだとすれば、日本のテーマ式、悪しき読書感想文式、ウシロユビササレ組にならぬようにだけ気をつける式……の作文教育は、つまらないばかりかハシバシ罪深いのだ。

ジャコモとアンナなど名門理工系大学のエリートだからと言ってしまったら実も蓋もないし、イタリア人のふたりが語学的に我らより数段有利な位置にあるのは当然である。だから、ふたりが本学生とは根本的に異なることなど問題とするに足りない。本学生の自由作文がどうのこうのいう以前に、彼らの自由作文には文字どおり自由の精神が横溢^{おういつ}しているように私には思われたのだ。何か楽しい工夫をしようおもしろいこと書いてやろう、見た目はエラソーだが、内容たるや、犬が西向き、尾は東、という程度の、書いても書かなくてもドーデモいいようなものとは違う何か、を書いて、読者のドギモを抜いてやろう、そんな自由闊達^{かつたつ}な精神が躍動する作文、と言えよいか。



レストラン「カーザ・ダ・リベイラ」で行なわれたお別れ会で撮る。中央のジョン・レノン似がジャコモ、向かって左がアンナ

ミズキにせよサヤカにせよ、単独でポルトガル語作文を書く力は到底ないから、トラバーリョ・デ・カーザに関しては、当然、私に頼りっきりとなる。だからこそ私は、書きたいテーマは独自に見つけてこい、それを日本語で書き出すくらいはやってくるべしと命じた。

見つけてきたテーマであるが、ミズキはヨーロッパの街並みの美しさや、それを保全する努力、サヤカは前述のとおり、ポルトガル料理とお菓子。彼女らの和文はまず和文と訳という作業でほぐさねばならない。そうしないとスッキリしたポルトガル語に訳せない。そして口頭の解説を附しながら私がポルトガル語を書き進めてゆくのであるが、傍らにいる彼女らに対しては、しっかり頭に

入れよ、文法的な説明はするけど理解しきれなかったら丸暗記じゃ、と激励する。なぜなら、この文章はゆくゆく **exame final** におけるリタ先生との一対一面談(オーラル・テスト)にそのまま使われるからだ。

オーラル・テストと言え、今回採用されたグループに分かれての寸劇は特に愉快であった。ミズキは「市場で」、サヤカは「レストランで」、カズキは「銀行で」という場面設定で、それぞれ 15 分以内の寸劇を、グループごとに考案し配役も学生自身が決めて演じるというもの。尾河先生も「魚屋で」という設定を与えられたグループに入り、カメラを上げメガネをかけ……という、ふた昔くらい前の在パリ日本人観光客のイメージを彷彿とさせる役廻りを演じた。

極度の緊張に追い込まれるとアタマが真っ白になってしまうと心配するサヤカは、寸劇で最も多いセリフを与えられたから大変であった。普段は十分に **communicativa** なサヤカなのであるが、授業では他の日本人同様発言はぐっと少なくなる。それを案じて仲間のヨーロッパ人学生たちは配慮して敢えてサヤカのためセリフを増やしてくれたのに違いない、と私は見ている。そうして少しでもリタ先生の心証をよくしてやろうと気遣ってくれたのだ。

「レストランで」におけるサヤカの役回りときたら、本来社交的な彼女のイメージにぴったりで愉快ではあったけれど、寸劇の前日は、深夜まで、わがアパートメントで、セリフの暗記と振り付けを手伝う羽目に陥る。ウェイターに何がお勧めですか、と訊くセリフ。サプライズのバースデーケーキが提供されたことを喜ぶセリフ。角刈り短髪で寿司職人のようなイケメンのウェイター(ポーランドのマチェック)から、仕事が終わったらそこの店でどうですビールでも一杯、と誘われ、オブリガーダと言い、紙片をイケメンに渡しこれが私のケータイ番号よ、と言うセリフ。私もつい図に乗り、紙片を渡すところでは、マチェックにウインクせよ、そうすると必ず拍手と指笛が取れる、とけしかけた。

皆集まっつの晩飯(ほぼ毎日。場所は私のアパートメント)は最も会話のはずむひとときであったが、某日、ヴィーニョ・ヴェルデ(未成熟ワイン)のカザール・ガルシーアですっかり上機嫌になったところで、ミズキの出席した 2010 年度教養諸学という科目を新松戸で担当したときの体験を話す。大体以下のような内容――

成績評価のために課すのは自由作文とする。テーマは自由だけど、できるなら、私がしゃべったり取り扱ったりした種々雑多なるテーマなりトピックなりから乖離^{かいり}しすぎていないことを望む、と伝える。ネット使うのはむしろ勝手だが、そこに書かれていることの検証は、紙の本なり自分の手足なりで調べてウラを取ってくれ、とも。でもまあ、大半はホームページだかウィキペディアだかの丸写し。そこまでは日常茶飯事だから我慢の範囲内である。話題にした覚えもない東京メトロ、それから法人会(こんなのあるのか)についてそれぞれ書かれた“作”文があった。授業にさえ出ていればこんな作文あり得ないのだが、それでも一読。爆笑し、しかしその後、無性に哀しくなった。それぞれのホームページで使われていたのであろう「お客様」だの「皆さま」だのという表現まで、そのまんまだったのだ。グーグルだかウィキペディアだか何だか知らないが、ネット公害に毒されて思考力を失い、本読まなくなったニンゲンのナレノハテはこうなのだ、と。

カザール・ガルシアを飲み干しいつものモンサラース産ヴィーニョ・ティントによってハイ状態に入っていた私のタカワライに、カズキが絡んできた。いわく、ワカイモンが皆そうだとセンセイはおっしゃいますがね、私は違う、と(ワカイモンが皆そうだなって言っちゃおらぬ。教養諸学という科目で、私の担当した範囲に絞れば、ほぼ例外なくそうだった、と述べたまで。日本女子大学が発行した優秀卒論集という冊子が手もとへ配布されてきたことがあるのだが、そこに収められた作文の内容なり表現能力なりを見て、イマノワカイモンは、などというバカげた常套句を吐く蛮勇を私は完全に失った)。

フーンそうかい。自分に限っては、ネット公害になんぞ毒されちゃおらぬと、そうおっしゃるのですかい。辞書ちゃんと持参しなかった件でこれ以上カラむのはやめておくけど、それにしても、オノレの手垢にまみれた文庫本の一冊もコヴィリヤンへ持ってきていないとは、一体どういうこった。愛読書なんて存在しないということでしょうが(結構楽しい泥仕合なのだ)。

コヴィリヤンへゆきたいというカズキの希望申し越しが、前述のとおり、あまりにも唐突であったので、最低限オレのコヴィリヤン・レポートくらい出発前に読んでおいてくれ、そこそこ愉快に書けているはずだ、と伝えておいたのだが、エラスムス・プログラムのエラスムスって、一体何ですか、なんてカズキはこの期^きに及んで訊いてくる。命名の由来など特にしっかり明記したにもかかわらず、

ネーデルラントが生んだこのユマニストの名さえ知らぬのか。あれだけ読んでおけと言ったのにね。とにかく、活字読む習慣がないのなら、あっさりそれを認め、うすみつともない日本語の使い手にならぬため本をタント(ポルトガル語でも同じ意味を表わすのに tanto という。偶然だ)読む, というシンプルな事実には、妙なプライドはさっぱり棄て、素直に向き合えばいいのに……。

カズキは最後の最後、カンティーナで行なわれた修了証書授与式に姿を見せぬという失態をやらかし(理由は何のことはない、単なる寝坊)、そのフォローを尾河先生が機転利かせてやってくださり、プレゼンターを務めてくれたパウリーノ副学長に私が重々謝罪して、何とか事なきを得たけれど、このようなことで心証を害するのは、大げさでも何でも無い、国際信義に関わる問題であることを、たとえ形式的にであれ彼を派遣してしまった私たちのほうが自覚しておくべきだ。



リスボア西郊の景勝地シントラからうねうねと西へ連なる山塊が絶壁となって海へ落ち込むところ、そこがユーラシア大陸の最西端ロカ岬だ。途中、ギンショの浜からロカ岬を遠望する



ロカ岬に立つ記念碑。16世紀ポルトガルの叙事詩人ルイス・デ・カモンイスの名句——ここに地果て、海始まる(『ウズ・ルジアダス』)——が刻まれている



ロカ岬にて

再び、外国人のためのポルトガル語夏季集中講座見学の記

ともあれこうして大した事故もなく(事故といえば、課外活動先の夜のアルメイダで、城壁の御影石の階段から私が足を踏み外したことくらい。ああ痛かった)、サヤカに言わせれば、きつかったけどこんな勉強したの生まれて初めて、という充実しきった雰囲気の中、まる一カ月の集中講座は閉幕した。私としても近頃、これだけ集中的に、熱く、教えたことはないなあ、というのが率直な感想だ。

大半の学生は日を置かずコインブラ、アヴェイロ、ギマランイスなどそれぞれの最終研修地へと散っていった。見送りつつ、本学生たちに優しくしてくれた EU 圏の学生たちとお別れの abraços を繰り返していると、不覚にも胸熱くなりどうにも始末に困った。